

富田正雄

75歳の男性が検診で右肺門部の8 cm大の腫瘤陰影を指摘され、気管支鏡下生検で扁平上皮癌と診断された。胸部CT及び遠隔転移の検索にてc-T2N1M0と診断されたが、縦隔リンパ節の検索のため行った食道超音波内視鏡にて左房内の腫瘤陰影を指摘し、c-T4N1M0の診断で人工心肺下に右中下葉切除+左房合併切除を行った。術後診断はp-T4N0M0であった。術後4カ月に直腸ポリープで粘膜切除術をうけ、直腸転移であった。

11. QOLを考慮した肺癌患者の胸水ドレナージ

熊本市民病院呼吸器科

田中不二穂, 平田菜穂美
福田浩一郎, 寺崎泰弘
平山正剛, 岳中耐夫, 杉本峯晴
志摩 清

肺癌胸水患者10例に対しQOL向上の目的でIVH用のArgyle Medicut Catheter Kit, 14GとPTCD用排液バッグを用い閉鎖回路で自然落下方式による胸腔ドレナージを施行した。ドレナージ中は歩行も可能であり、癒着術を施行した6例中4例が有効であった。

12. 癌性胸水に対するハイムリッヒ弁を用いたドレナージ療法

鹿児島大放射線科 飯田清高
向井浩文, 宮園信彰, 井上裕喜
中條政敬
鹿児島済生会病院 岡 春己

方法は、16~24Frのトラカールチューブを胸腔内に挿入、ハイムリッヒ弁(一方向弁)を持続し、自然滴下で胸水を排液後、薬剤を注入し、その後も自然滴下で排液し、胸水が陰性化した時点、また陰性化しなくても10日目まで抜去した。

使用薬剤は、CDDP, MMC, ミノマイシン, OK-432で、原発性肺癌3例, 転移性肺癌2例の6病変に施行し、結果は著効が3病変, 有効が1病変, 無効は2病変であった。

13. 肺癌における腫瘍マーカーの有用性

大分県立病院胸部外科

村岡昌司, 内山貴堯, 山岡憲夫
岡 忠之, 佐野 功
腫瘍マーカー(CEA, SCC, NSE, SLX)の肺癌における有用性を検討した。組織型別の陽性率ではCEAがAdeno: 48%, SCCがSq: 38%, NSEがsmall: 37%, SLXがAdeno: 43%と各々高率で病期の進行と共に上昇した。術前値と予後との関係では、腺癌, stage I 症例で術前CEA陽性群が陰性群より予後不良で、特に10ng/ml以上の高値では再発率が高かった。また術後陰性化例でも腺癌, n2以上ではCEA再上昇を伴う再発の危険が高く、CEAは再発の予知に有用であると考えられた。

14. 原発性肺癌におけるシアル化Le^x測定の意義

国病九州がんセンター

横山秀樹, 高梨伸子, 松岡泰夫
田山光介, 井上 隆
矢野篤次郎, 麻生博史
一瀬幸人

はじめに: CSLEXの腫瘍マーカーとしての有用性を検討した。対象・方法: 対象は肺癌111例である。(腺癌60, 扁平上皮癌38, 小細胞癌13)対照として非癌症例27例を用いた。患者の血清中のCSLEXをELISA法にて測定した。結果: 肺癌例の血清CSLEX値は対照よりも高かった。組織別では腺癌が高値を示し、病期が進むほどその値は上昇した。感度, 特異度, 精度は

CEA, SCCと同等であった。

15. 非小細胞肺癌(NSCLC)における染色体構造異常の検出—Chromosome Painting ProbeによるFluorescence in situ Hybridization(FISH)法を用いて—

長崎大第1外科

藤瀬直樹, 田川 泰, 辻 博治
赤嶺晋治, 高橋孝郎, 中村昭博
川原克信, 綾部公認, 富田正雄
NSCLCの切除症例より癌細胞の短期培養を行い染色体標本を作製し今回3番, 17番に特異的なchromosome painting probeを用いたFISH法により構造異常の検出を試みた。初代培養は腺癌において成功率が高かった。本法により腺癌症例で3番, 17番染色体の転座, 欠失が同定できた。本法は短時間に多くの細胞の染色体を観察することができ、構造異常の検出に有用な手段の一つであると思われた。

16. 肺癌患者におけるPolymerase Chain Reaction (PCR)を用いたAdenovirus DNAの検出及び定量

九州大胸部疾患研 桑野和善
原 信之
北九州市立松寿園内科

松葉健一
UBC Pulmonary Research Laboratory J.C. Hogg

肺癌とLatent Adenovirus Infectionとの関連性の有無をPCRを用いて検討した。その結果、肺癌患者の肺実質には、対照群と比較して有意に多くのAdenovirus E1A DNAが検出され、肺癌の危険因子の一つである可能性が示唆された。

17. 当科で経験した肺癌多発家系の検討

長崎大第1外科

松尾 聡, 田川 泰, 中村昭博
赤嶺晋治, 高橋孝郎, 辻 博治
川原克信, 綾部公認, 富田正雄
当科で経験した肺癌多発家系
について若干の考察を加え報告
した。同家系では計9例の肺癌
患者を確認しており, 今回は当
科で手術を施行した4症例を対
象とした。病理組織学的には全
例Stage I の高分化腺癌で, 核
DNA量を測定したところ, 全て
DNA Diploidyであった。また
最近再発した1症例についても,
再発巣は同様に高分化腺癌,
DNA Diploidyを示していた。
同家系は, 発端者の発症年齢が
やや高いもののcancer family
と思われた。

18. 非小細胞肺癌に対する CDDP/CBDCA/VP-16併 用療法—pilot study—

佐賀県立病院好生館内科

副島嘉修, 小柳孝太郎

太田善郎

佐賀医大呼吸器内科 中原快明

加藤 収, 山田穂積

75歳以下のIIIb, IV期の非小
細胞肺癌に, CDDP 80mg/m²
day: 1, CBDCA 200mg/m²
day: 1, VP-16 100mg/m²
day: 1, 3, 5を4週毎2コー
ス, rG-CSF 75μg/bodyを併用
した。結果はIIIb期: 4例, IV期
: 7例, Sq: 6例, Ad: 4例,
Large: 1例, CR: 1例, PR:
5例で奏効率: 54.5%, 3例に
grade 4の血小板減少, 1例に
grade 4の白血球減少が出現し
た。全例消化器毒性を認めたが
一過性であった。奏効率, 副作
用からみて非小細胞肺癌に有用
性が高いと思われた。

19. 非小細胞肺癌に対するUFT 連日経口投与とCDDPとの 併用療法

国病九州がんセンター呼吸器部

高梨伸子, 横山秀樹, 麻生博史

井上 隆, 矢野篤次郎

田山光介, 一瀬幸人

手術不能の非小細胞肺癌を対
象としUFT400mg/m²を3週間
連日経口投与, CDDP80mg/m²
を8日目に点滴静注し, 4週毎
に2コース以上施行した。現在
までに登録された25例について
奏効率は37.5%と他の併用化学
療法に比べて遜色がなく,
grade 3以上の毒性は嘔気/嘔
吐が20%, 骨髄抑制が8%, 腎
障害が4%にみられたのみで安
全性も高いことから, 本療法は
非小細胞肺癌に対する有効な治
療法となる可能性が示唆された。

20. 肺非小細胞癌に対する Cisplatin, Carboplatin, お よびEtoposide三者併用療 法の検討

国療南九州病院呼吸器科

岩見文行, 脇本讓二, 森進一郎

福永秀智, 廣津泰寛

肺非小細胞癌に対するCDDP,
CBDCA, etoposide三者併用療
法のpilot studyについて報告し
た。プロトコールはCDDP 50
mg/m² day 1, CBDCA 200mg
/m² day 1, etoposide 100mg/
m² day 1, 3, 5を3ないし4
週毎に2クール以上施行した。
効果はMR 3例, NC 4例, PD 1
例と悪く, 副作用は血液毒性が
主で特にGrade 3以上の血小板
減少が半数にみられた。

21. 非小細胞肺癌に対するプラ チナ製剤併用療法の安全性 と臨床効果

九州大胸部疾患研 中西洋一

國武律子, 松木裕暁, 原 信之

非小細胞肺癌に対するプラチ
ナ製剤併用療法(CDDP +
CBDCA + VDS)の安全性と効
果につき検討した。CDDP 80
mg/m², CBDCA 300mg/m²,

VDS 6 mg/m²を投与。21例の患
者に化学療法を施行し, その安
全性につき検討した。Grade 3
以上の副作用は, 白血球減少16
/21(76%), 血小板減少4/21(19
%)であった。初回治療例の内,
評価可能症例15例中7例(47%)
でPRが得られた。非小細胞肺癌
に対する本療法の有用性が示唆
された。

22. 肺癌に対するダブルプラチ ナ療法—phase I study— 産業医大第2外科

久米 徹, 中西良一, 吉松 隆

今林 悟, 光富徹哉, 白日高歩

非小細胞肺癌(臨床病期III A
以上, 術後再発)に対して,
CDDPとCBDCAの併用による
第I相試験を計画した。CDDP
を80mg/m²に固定し, CBDCA
を200mg/m², 以下250, 300, 350
と4段階にdose upした。Dose
escalationにより血小板減少症
が高度に認められ, この併用療
法のdose limiting factorと考え
られた。その他, 副作用は軽微
であり比較的 safely 投与できた。
奏効率はCDDP/CBDCA=80/
300群が最も良好であった。

23. 小細胞肺癌に対するHigh Dose Platinum療法の試み

九州大胸部疾患研 松木裕暁

國武律子, 中西洋一, 原 信之

小細胞肺癌に対する高用量プ
ラチナ製剤投与療法(CDDP +
CBDCA + VP16)の安全性と効
果につき検討を加えた。CDDP
80mg/m², CBDCA 300mg/
m², VP-16 200mg/m²を投与し
た。白血球減少に対してG-CSF
を併用した。18例の患者に化学
療法を施行し, 安全性を検討し
た。WHOグレード3以上の副
作用は, 白血球減少12/18(67
%), 血小板減少9/18(50%)であ
った。評価可能症例11例中10例